「男、突っ走る！」

第96回

第一稿

作・壽倉　雅

登場人物

木内　雅也（24）　『オフィスツリーイン』代表

木内　孝志（53）　雅也の父
木内　真保（51）　雅也の母
木内　健次郎（20）　雅也の弟

植野　雪奈（21）　名古屋芸術専門学校３年生
船倉　篤志（21）　名古屋芸術専門学校３年生
奥村　裕司（22）　名古屋芸術専門学校３年生
山口　拓海（21）　名古屋芸術専門学校３年生
安永　和也（21）　名古屋芸術専門学校３年生

国枝　佐代子（59）　『スリジェネ』総合プロデューサー
国枝　茉奈（27）　佐代子の娘
山中　敦夫（44）　劇団主宰者
田所　俊子（63）　市民映画プロデューサー

山森　直海（19）　『スリジェネ』メンバー
大坂　美央（17）　『スリジェネ』メンバー
阿川　緑（30）　『スリジェネ』メンバー
麦沢　愛花（20）　『スリジェネ』メンバー
坂本　寿梨（20）　『スリジェネ』メンバー

鬼頭　翔子（73）　ミュージカル出演者
弘田　洸（23）　ミュージカル出演者
鈴岡　ゆりえ（19）　ミュージカル出演者
山川　裕作（20）　ミュージカル出演者
北　まひる（22）　ミュージカル出演者
月島　藍那（22）　ミュージカル出演者
大森　泰明（58）　ミュージカル出演者
加原　美穂子（35）　ミュージカル出演者
加原　千世（13）　ミュージカル出演者
林　亜里沙（12）　ミュージカル出演者
赤澤　隆太（11）　ミュージカル出演者
辻松　翔（11）　ミュージカル出演者
大坂　理央（12）　ミュージカル出演者、美央の妹

1中央交流センター・ラウンジ

雅也、佐代子、茉奈、田所が会議をしている。

雅也「いよいよ明日からですね、『神様が願うまで』の稽古」

佐代子「うっちー、久しぶりの現場復帰でウキウキしてるんじゃない？」

雅也「それはもう。コウタやとみーがいなくなって、ショウもレイナもマリエもいなくなってしまいましたけど、他のキャストの皆さんと楽しくやっていきたいと思います」

田所「うっちーは、幅広い年代の人とコミュニケーションが取れそうだから、やっぱりメンバーリーダーは適任かもしれないわね」

茉奈「確かに、それは言えてますね」

雅也「メンバーリーダーですが、あくまでキャストスタッフのパイプ役ですから、円滑に稽古が進むようにフォローしていきます」

田所「今や『スリジェネ』の中間管理職だもんね」

雅也「それはもう。早いものでもう一年近く、国枝さんのもとで『スリジェネ』の運営に関わらせていただいてます。そりゃ、大変な時期もありました。でも今は、久しぶりにメンバーたちと一緒に舞台に立てることが楽しみで」

佐代子「うっちーは、運営もメンバーも全部経験してるもんね。もしかしたら、私以上に『スリジェネ』のことを知り尽くしてるかもしれないわ」

雅也「（苦笑して）いえいえ、そんなことは」

田所「（佐代子に）あ、増宮さんどう？」

佐代子「ご家族の方から連絡があって、脳梗塞の症状が思わしくないから今回の舞台出演は難しいだろうって」

雅也「確か、増宮さんってヤマさんの話だと、作中に出てくる饅頭屋の女将役ですよね」

佐代子「そう。それでね、昨日翔子さんに出演オファーの相談してみたの」

雅也「翔子さんって、去年『七夕物語』に出

演してくださった」
佐代子「そうそう。そしたら、スケジュールが空いてるからオッケーだって。明日の顔合わせにも参加してくれるって」
田所「良かったわね」
雅也「いやぁ、また翔子さんと同じ舞台に立てるなんて光栄です」
佐代子「明日は参加費の集金と、プリントの配布、その後に自己紹介という流れです。後の稽古場の仕切りは、ヤマさんに一任してあります」
雅也「分かりました」
茉奈「うっちーは、受付よりもキャストと一緒に集まってた方が良いんじゃない？」
雅也「いや、僕はスタッフワークもやるつもりですけど」
田所「ああ、確かに明日は私と茉奈ちゃんで対応したほうが良いかも。国枝さんはプロデューサーとしてあまり動かないほうが良いし、うっちーはキャストだからメンバー

や他のキャストの人と一緒にいたほうが自然かも」

雅也「分かりました」

2 南公民館・全景（翌日）

3 同・大会議室

受付をしている田所と茉奈。

プロデューサー席と演出席にそれぞれ座っている佐代子と山中。

椅子の最前列に並んで座っている雅也、直海、美央、緑、愛花、寿梨。

佐代子「（雅也と直海に）うっちー、ナオ。この後の自己紹介の前に、主要スタッフ紹介をするんだけど、その時に軽くうっちーとナオの紹介もするから、簡単な挨拶よろしくね」

雅也「はい」

直海「分かりました」

佐代子「自己紹介始まると長いから、先にお

手洗い行ってくるわ（と出ていく）」
雅也「昨日言ってくれたら良いのに」
直海「何、昨日って？」
雅也「昨日も運営会議あったから。挨拶しろって言われても、俺は国枝さんみたいにその場でペラペラ思いついて言葉が出てくるわけじゃないんだから」
寿梨「うっちー、いつも仕事とかでもそうだけど、挨拶ってどうしてるの？」
雅也「ある程度、どういうことをしゃべろうかっていう原稿というかメモは用意するよ。だからああいう無茶ぶりが、一番勘弁してほしいんだよ」
山中「うっちーなら大丈夫だって」
緑「いけるよ、うっちーなら」
美央「うっちーファイト」
雅也「みんなして、他人事だと思って……」
×　×　×
顔合わせが行われている。
佐代子と山中が一同と向き合うように

座り、キャスト最前列の椅子に座る雅也、直海、美央、緑、愛花、寿梨。
後ろの席にそれぞれ座る翔子、洸、ゆりえ、裕作、まひる、藍那、泰明、美穂子、千世、亜里沙、隆太、翔、理央。
横の壁側に座っている茉奈と田所。

佐代子「（その場で起立し）改めまして、今回総合プロデューサーを務める国枝です。オーディションに合格し、こうして皆さんと出会えたのも何かの縁だと思います。本番まで、稽古日数が少ない中で、皆さん一丸となって稽古に臨んでいただければと思います。よろしくお願いします」

拍手をする一同。

山中「（その場で起立し）皆さん、おはようございます」

一同「おはようございます」

山中「今作の脚本と演出を担当する山中と言います。気軽にヤマさんと呼んでください。市民ミュージカルということで、皆さんに

は時に楽しく、時に真面目にしっかりと役と向き合っていただければと思います。約二ヶ月半、皆さんで頑張っていきましょう。よろしくお願いします」

拍手をする一同。

佐代子「では自己紹介に入る前に、『スリジェネ』のリーダーであるうっちーと副リーダーのナオから、簡単なご挨拶をお願いしたいと思います」

雅也「（キャスト一同に振り返り）『スリジェネ』リーダーのうっちーこと木内雅也と言います。一年近く運営側に専念していたのですが、この『神様が願うまで』からメンバー復帰をしました。リーダーと言っても、決して僕は舞台経験が豊富なわけではありません。また運営事務局を兼務しますので、稽古のことや全体のことなど、遠慮なくお気軽に声をかけていただければと思います。皆さんが円滑に稽古できるようにバックアップしていきたいと思います。よ

ろしくお願いします」

拍手をする一同。

寿梨「（小声で）あれだけ言ってたのに、結局スラスラ話せてるじゃん」

美央「それがうっちーなんだよ」

佐代子「では、続いて副リーダーのナオお願いします」

直海「はい。（とキャスト一同に振り返り）メンバー副リーダーのナオです。詳しい自己紹介は、また改めて。『神様が願うまで』という、素敵な作品を原作にした市民ミュージカルを皆さんと一緒にできることを嬉しく思います。いろんな年代の人たちが集まっているので、これまでの『スリジェネ』の作品とはまた違ったものができるんじゃないかと楽しみにしています。二ヶ月半、よろしくお願いします」

拍手をする一同。

4 同場所（時間経過）

休憩時間。
翔子が資料を読んでいる――雅也がやってくると、
雅也「翔子さん」
翔子「あら、うっちー」
雅也「ご無沙汰してます」
翔子「ちょうど一年ぶりね」
雅也「昨年は本当にありがとうございました」
翔子「今回はうっちーも出るんでしょ。嬉しいわ、また一緒の舞台に立てるなんて」
雅也「とんでもない。こちらこそ、こうしてまた翔子さんとご一緒できるなんて光栄です」
翔子「牛の役、私好きだったわ。初舞台であそこまで印象残せるなんて大したものよ。うっちーは、これから伸びると思うわよ」
雅也「ありがとうございます」
と、雅也の携帯に着信が鳴る。
雅也「ちょっと、すいません（と出ていく）」
×　×　×

隆太「（翔に）なあなあ、何小？　俺、東部小」

翔「俺、北小」

隆太「よろしく」

亜里沙「隆太、自分の名前言わないと」

隆太「あ、そっか。俺、赤澤隆太」

翔「俺は、辻松翔」

亜里沙「私は林亜里沙。隆太の一つ上の幼馴染なの」

翔「よろしく」

×　×　×

千世「（美穂子に）今日、住吉先生いないんだね」

美穂子「今日もレッスンでしょ。レッスンの合間縫って、こっちの稽古もやるみたいだから」

千世「そっか」

×　×　×

泰明「（愛花に）むぎちゃん、久しぶりだね」

愛花「やっさん。お久しぶりです」

緑「そっか。二人とも、ワークショップ公演一緒に出てたね」
泰明「そうなんだよ。あ、ご主人元気？」
緑「ええ。今度、久しぶりに舞台に立つことが決まって、今必死でセリフ覚えてます」
泰明「良いね」

×　×　×

美央「え、まひるちゃんの母校なの？」
まひる「そう。だからさっき、自己紹介で高校の名前聞いたとき、私の後輩だと思って」
美央「じゃあ、あの先生知ってる？　国語の田中先生」
まひる「私の時もいた。まだいらっしゃるんだね」
美央「うん」

5 同・廊下

ゆりえ、裕作、藍那が階段を上りながら話している。
裕作「へえ、じゃあゆりえは自分の通う大学

のパンフレットに映ったんだ」
ゆりえ「映ったって言っても、一ページだよ。とてもモデルやってる藍那さんとは比べ物にならないけど」
藍那「そんなことないって。私だって、なかなかパンフレットとか広告物のモデルの案件はなかなかなくてね。事務所入ってた時期もあったんだけど、事務所に所属してるから仕事に恵まれるとは限らないから」
裕作「大変な業界なんだな」
と、大会議室へ入っていく――廊下の隅で電話をしている雅也。
雅也「え、じゃあミドリさんはTシャツ買わないって言ったんですか？」
と、電話越しに佐代子の声が聞こえる。
佐代子の声「そうなのよ。しかも、引率できてた保護者の方たちがいる前で。買わないって言う選択肢もあるんじゃないかって思われたら心外でしょ。言うのは良いけど、せめてタイミングを考えてほしいと思って

ね」

雅也「そうですか……」

佐代子の声「舞台経験が豊富だから、ヤマさんと一緒に稽古場を仕切るんじゃないかっていうのが不安でね。『スリジェネ』のメンバーリーダーはあくまでもうっちーだから、あまり余計なことをしないように気をつけといてね」

雅也「分かりました……では、失礼します」

と、電話を切ると、大きな溜息をつく

――男子トイレから洸が出てくる。

洸「どうかしました？」

雅也「あ、いえ。大丈夫です」

洸「改めて、よろしくお願いします」

雅也「こちらこそ」

洸「キャストしながら、事務局も兼任するんでしょ。大変ですね」

雅也「（苦笑して）大変なことには、もう慣れました」

洸「え？」

雅也「楽しくやっていきましょう。年齢も近いことですし」

洸「確か、うっちーは僕の一個上でしたね」

雅也「ええ。前まで『スリジェネ』には、それこそ一個下や二個下のメンバーがいたんですけど、夏の公演を最後に卒業しちゃったんです。ほぼ同年代の人がいて、良かったと思って」

洸「こちらこそです。楽しくやっていきましょう」

雅也「はい」

6 木内家・居間（夜）

雅也が駆け込んで入ってくる。

雅也「ただいま」

テレビを見ている孝志、真保、健次郎。

一同「おかえり」

雅也「ねえ、駅まで送ってって」

真保「今から？」

健次郎「どこ行くんだよ」

雅也「名古屋」
真保「名古屋？　何しに」
雅也「今日、専門の集まりやってるの。あっぽんも京都から戻ってきてるし、みんな今二次会やってて、次の三次会から合流するってゆきちゃんにも伝えてあるから」
孝志「（スマホを見て）今から出れば、名古屋方面の最終に間に合うぞ」
雅也「ありがとう。あ、ちょっと待って。着替えてくる」

7名古屋駅・金時計（夜）
雅也が走ってやってくる。
雅也「ごめん、みんな！　お待たせ」
金時計の下で集まっている雪奈、篤志、裕司、拓海、和也、その他友人たち。
雪奈「やっと来たね、うっちー」
雅也「九時まで稽古だったからね。それが終わって、家戻って、着替えてたら、どうしてもこんな時間になっちゃって」

拓海「よく来られたな」
雅也「だってこの飲み会は、夏休みには毎年
やってるでしょ。何が何でも行かなきゃと
思って。だって、あつぽんだって京都から
来てるんだから」
篤志「さすがうっちー、よく来た（と強く抱
きしめる）」
雅也「あつぽーん。あ、新作ちゃんと持って
きたからね」
篤志「あざっす」
裕司「次、どこにしようか？」
和也「うっちー、何食べたい？」
雅也「お腹空いちゃったから、がっつり食べ
れる系が良いけど、みんなはもう次三軒目
だから飲めれば良いのか」
裕司「肉系にしとくか。うっちーはがっつり
食べて、俺たちは酒メインで良いだろ」
雅也「食べるけど、せっかくならちゃんと飲
むよ。みんなに合わせるよ」
雪奈「じゃあ、行きますか」

雅也「よし、行こうッ」

∞居酒屋（夜）

それぞれの酒で乾杯する一同。

一同「かんぱーい」

一同、食事をしながら、

雪奈「うっちー、明日は？」

雅也「明日も稽古」

篤志「大丈夫か？」

雅也「うん。今日から始まったばっかで、今日も明日も自己紹介と出演者同士の親睦を深めるレクリエーションがメインだから」

裕司「終電ないけど、今日どうするんだよ」

雅也「まあ、漫喫かカラオケでも止まるよ」

雪奈「うっちー、まさかこの一軒で帰ろうとしてるわけじゃないよね」

雅也「え……」

雪奈「三軒目からしか合流してないんだから、もっと飲んでもらわないと」

雅也「けど、四軒目なんて時間的に空いてる

店ある？」

雪奈「場所はあるじゃない」

雅也「どこ？」

雪奈「私のマンション」

雅也「マジか……」

9 マンション・表（夜）

タクシーが止まり、助手席から雪奈、後部座席から雅也と、コンビニの袋を持った篤志が降りてくる――出ていくタクシー。

雪奈「（雅也に）ありがとう、タクシー代出してもらっちゃって。（と篤志に）あつぽんも、コンビニの分払ってもらっちゃって」

雅也「良いよ良いよ」

篤志「泊めてもらうんだもん、これぐらい」

10 マンション・雪奈の部屋

トランプゲームをしている雅也、雪奈、篤志。

雅也「ああ、負けた……」
雪奈「はい、うっちー。飲んで」
と、小さいグラスにウイスキーを注ぐ
――雅也、一気に飲み干す。
雅也「ああ、キツイ……。よし、二回戦行くよ。次は負けないから」
×　×　×
翌朝。
ベッドで眠っている雪奈。
フローリングで雑魚寝している雅也と篤志――雅也が目を覚ます。
雅也「（スマホを見て）げ、もう十時……。（と荷物をまとめると）ゆきちゃん、俺稽古あるから帰るね。泊めてくれてありがと」
雪奈「（目を覚まして）良いよ、頑張ってね」
雅也「じゃあね。あつぽんにもよろしく」

11　駅・表

雅也が出てくる――後ろから美央の声がする。

美央の声「うっちー」

雅也が振り返ると、美央と理央が歩いている。

雅也「ミオ。（と理央を見て）おはよう、リオ」

理央「おはようございます、うっちー」

美央「珍しいね、うっちーが電車で来るなんて」

雅也「昨日、家戻ってすぐ名古屋行ってさ、朝方まで専門の友達と飲んでたの」

美央「じゃあ、名古屋からそのまま来たの」

雅也「うん」

美央「よくやるね」

雅也「さ、今日も稽古頑張ろうかね」

と、美央と理央と話しながら歩いていく。

つづく